



人間牧場主・年輪塾々長
若松 進一

食が生み出す コミュニティ

衣・食・住の三つは、人間が生きていくために必要な最低限の条件と言われていますが、衣も食も住も社会の進展や経済環境の変化に大きく左右されることは、戦後日本の歴史を見ても明らかです。思い返せば小さなちやぶ台を囲み、母親の作った料理を食べながら、貧しくも大勢の家族が団欒する姿は、

食が生み出す一番小さなコミュニティだったのでしょうか、現代はそれさえも



双海の青空に映えるラブじゃこ天

殆ど失われ、同じ屋根の下で暮らしていても、別々のものを別々の時間別々に食べたりするなど、食環境は住環境と共に大きく様変わりをしているようです。家庭の食を巡る炊事事情は言うに及ばず、土間に設えたかまどで薪を燃やしてご飯を炊いたり、まな板の上で丸々一匹の魚を捌いたりしていた台所は、衛生的なシステムキッチンが入り、火を使わないオール電化となつて、火をつけるマッチさえ知らない世代が増え、半調理や完全調理した惣菜を電子レンジで温めて、食卓に並べるだけの手間要らずとなり、また週末は外で外食を楽しむ姿からは、物の豊かさの陰に潜む心の貧しささえ垣間見えるのです。

さて今月のテーマは「食が生み出すコミュニティ空間の果たす役割とその効果」ですが、食と何を組み合わせるか、生まれるであろうコミュニティ空間の果たす役割とその効果は随分違つてくるようです。そこで4つの視点から考えてみました。

① 棚田・段々畑オーナー

農業の盛んな愛媛県内でも最近が高齢化や過疎化によって、耕作放棄地が次第に増えてきました。とりわけ農村の原風景

を醸していた、自然条件的に厳しい棚田や段々畑も例外ではなく、田畑が一枚また一枚と姿を消しつつあることは寂しい限りですが、幸いそのことに心を痛める人たちが、棚田や段々畑を守るために様々な取り組みを始めています。棚田や段々畑はエリア全体がまとまってこそ景観として価値があることを訴え、棚田・段々畑オーナー制度を導入して心ある人たちの人力と資金を誘い、時には棚田で作ったお米で日本酒を醸造したりしながら、農村と都市の交流に発展させていますが、棚田での米作りや段々畑での作物作りは、作付けから収穫までかなりの協働農作業が必要のため、それらのプロセスを通してコミュニティが出来上がり効果を上げています。棚田保全は単に食や農業、それに景観を守るだけでなく、水環境も守る大切な運動でもあるのです。

② グリーンツーリズム

グリーンツーリズムは他地域の人が農山漁村を訪ね、自然や暮らしのありのままの姿を生活文化として親しむものです。その目当ては何といつても食文化で、農家レストランや宿泊サービスは勿論のこと、様々な体験活動プログラムが

用意されています。それらは地域の人が長年の暮らしや生産で培った生活の知恵であり、人々を温かく迎える地域ぐるみのローカルコミュニティなのです。今ではツーリズムでたまたま立ち寄った地域が気に入って、移住を決意し移り住む人も数多く、ツーリズムはどちらかというと閉鎖的だった田舎に新しいコミュニティの風を起こし、食をテーマにしたツーリズムが新たな起業や経済を産み、過疎や高齢化で閉塞感漂う地域の田舎再発見や、地域活性化のきっかけとなっています。海に面したわが町ではグリーンツーリズムは勿論のこと、海や海岸の魅力を生かしたシートツーリズムも盛んになってきており、海山をセットにしたコミュニティの輪が次第に広がっています。

③ B級グルメ

最近B級グルメが大人気で、あちこちで開かれる地区大会や全国大会は、幾つものテント屋台が軒を連ね、地産地消のご当地自慢のアイデア料理を創作して競い合い、大勢の参加者で賑わっています。参加者の投票で覇権を争うナンバーワンは異様なほどの過熱ぶりですが、中には富士宮ヤキソバのようにB級

グルメ大会がきっかけで、地域の知名度が抜群に上がり、「富士宮といえばヤキソバ」と言われるまでになり、大会だけでなく市内にヤキソバが食べられる店がどんどん増えているようです。多分これはこれまでのようなローカルコミュニティだけではなく、食が産んだ大きなテーマコミュニティだと思えます。ただB級グルメの危惧は、成人病の危険因子と言われる糖分、塩分、脂分に加え大食い傾向の感否めず、また日本の伝統的食文化を壊す恐れも指摘されていますが、今ではゆるキャラとともにパロディ豊かなコミュニティ運動に発展しています。

④ お年寄りの居場所ランチ

最近の高齢者は金あり、暇あり好奇心ありと何かと元気です。しかし一方では人の中に入れない孤独な高齢者もいて大きな社会問題となっています。そこで最近話題になっているのがお年寄りが気楽に立ち寄れる居場所作りです。高齢者福祉はサービスの行き届いた施設が随分整い、介護も手厚く制度化されていますが、そうした施設は介護や要介護を必要としない人にとっては、気軽に立ち寄ることの出来ない場所なのです。そんな悩みを払拭するように、最近街中の空き家

を利用した高齢者の居場所が出来始めました。そのメインはワンコイン程度の安値で食べられる心のこもったランチです。高齢者にとって一日三度の食事の準備は容易なことではありません。ましてや栄養バランスの取れた食事等望むべきもなく、一人暮らしや病弱で外出もままならなくなると、安否さえ確認できなくなるのです。その点ランチ付きの居場所は、食事や日常会話を通じた異世代交流コミュニティに発展する大きな意味があるようです。

こうして色々な事例を元に考えれば、食には人を集める魅力があり、食が様々なコミュニティを産んでゆくことが良く分ります。

「世の中は 何はさて置き 食べることにすればガヤガヤ 会話始まる」
 「あちこちで 食をテーマに 事興し
 その輪広がり まちが元気に」
 「人間は 一人じゃ生きて 行けません
 食の仲立ち 大きな力」
 「大ブーム B級グルメ 知ってるが
 A・Cの意味 まったく知らず」
 (若松進一 的笑談阿)